

# 老いと仙人

井波 律子

中国の仙人像は「<sup>どうか しんせん</sup>道家的神仙思想」と深い関わりがある。俗世を離脱し大自然と一体化することを理想とする「道家思想」と、不老不死を究極の目的とする「神仙思想」が結びつき、道家的神仙思想となったのは、3世紀から4世紀の<sup>ぎ しん</sup>魏・晋の時代であった。

しかし、<sup>ろうし</sup>老子とともに道家の祖と目される<sup>そうし</sup>荘子（前369?—前286?）の書に、すでに仙人の話が見えることから、神仙思想と一線を画していたとされる道家思想そのものに、もともと神仙的傾向があったことがわかる。荘子の描く仙人像は以下のとおり。

<sup>は こや しんじん</sup>藐姑射の山に神人が住んでいる。その肌は氷や雪のように真っ白で、しなやかな肢体はまるで<sup>おとめ</sup>処女のようなようである。かの人は五穀を口にせず、風を吸い露を飲み、雲に乗ったり飛翔する龍にまたがったりして、<sup>しかい</sup>四海の外に遊ぶ。（『荘子』逍遥遊篇）

荘子の描く「神人（仙人）像」は、処女のようにしなやかな肢体をもつ、まさしく「不老不死」の存在であり、穀物を口にせず、ただ風（大気）

と露を摂取して、軽やかに空中飛行する。仙人というと、とてつもない老人を連想するが、中国の仙人は本来、このように不老すなわち永遠の若さを保つ存在だとされ、このイメージは後世も変わらない。さらにまた、ここにみえる「藐姑射の仙人」は肉体を純化するために、穀物をいっさい口にしないとされるが、これまた後世の重要な神仙術の一つである「辟穀」の方法にほかならない。

莊子は分裂と混乱の戦国時代せんごくを生きた思想家だが、中国全土が統一された秦・漢しん かんの時期になっても、秦の始皇帝しや前漢の武帝ぜんかん ぶのような皇帝から庶民に至るまで、不老不死を渴望する神仙志向はますます盛んになる一方だった。

それかあらぬか、前漢の学者劉向りゅうきやう（前79～前8）の作だとされる『列仙伝』には70人余りの仙人の伝記が収められており、その多くは庶民階層の出身である。彼らの職業は馬医者、薬売り、小役人、酒造り、鏡磨き、草履売り、産婆等々、千差万別であり、なかには乞食稼業の者までいる。仙人になる機会は万人に平等であり、現実社会の身分や階層はまったく無関係なのである。

もっとも、何の試練も経ずに仙人になれるわけもなく、修行を重ねる必要がある。『列仙伝』に登場する仙人の多くは、先にあげた「辟穀」を実践し、穀物の代わりに松の実や茯苓ぶくりやうなど植物性の仙薬を長期間服用して、徐々に肉体を純化する。この結果、白髪は黒くなり、抜け落ちた歯はまた生えるというふうに、少年もしくは壮年の健やかさを取り戻して、不老長生の身となり、長い場合は数百年もの間、下界で生きつづけ

たあげく、ついに昇天して仙界へと移動するのである。仙人修行のメニューとしては、辟穀のほか、呼吸術や導引（柔軟体操）、房中術などの身体トレーニングが併用されるケースも多い。

前漢・後漢あわせて400年つづいた漢王朝が滅亡した後、中国はふたたび乱世状況となり、分裂の魏晋南北朝時代に突入する。魏から東晋にかけて、道家思想と秦・漢以来の神仙志向が結びついて、体系的な道家的（とうしん）神仙思想が形成されたが、その随一の理論家は東晋の葛洪（284？～363）である。その著『抱朴子』は神仙思想の実践理論を説いたものだが、ここにはいくつかの注目すべき見解がみられる。不老不死となり仙界に昇天するためには、鉱物性の仙薬「金丹」の服用が必須の条件であり、先にあげた『列仙伝』の例のように植物性の仙薬だけでは不十分だとしていること。複雑な工程をへて完成する「金丹」の作り方をマスターするためには、すぐれた師匠についてきびしい修行を積みねばならないこと、等々である。『列仙伝』の仙人修行に比べ、格段に手続きが複雑になっているのがみてとれる。仙人になるのも大仕事なのである。

ちなみに、葛洪はこうして体系化した仙人理論を踏まえて、90人余りの仙人の伝記を取めた『神仙伝』を著している。その委曲を尽くした叙述方法は、先行する『列仙伝』の簡潔そのものの描写に比べれば、上質の短篇小説といってもよいほどだ。ここには多種多様の仙人像が鮮やかに描き分けられ、奇想天外な物語世界が繰り広げられる。

たとえば、70歳で仙薬を服用して以来、どんどん若くなった西河少女という仙女の話など、まさに抱腹絶倒である。漢王朝の使者が西河の

ほたりを通ったとき、妙齢の美女（西河少女）が老人を鞭うっているのを見かけ、不審に思ってわけをたずねた。すると、彼女が言うには「これは私の息子です。私は仙薬をのんで若返ったので、息子にもめといったのに聞き入れず、こんなに老いぼれてしまいました。それで腹が立ったので折檻しているのです」とのこと。聞けば、少女のような彼女はすでに130歳、老いぼれ息子は71歳とのことだった。ことほどさように、仙人や仙女は時空を超えて永遠の美と若さを保つ不滅の存在にほかならないのである。

『列仙伝』や『神仙伝』に描かれた仙人物語の系譜は、その後、「杜子と春し」などの唐代伝奇小説、元曲（元代の戯曲）、明代の白話短篇小説にめんめんしゅんと受け継がれてゆく。これらの作品は、ふつうの人間が仙人になるための通過儀礼の様相を描くことに主眼を置くことが多く、ほとんど神仙物のパターンにまでなっている。しかも、この通過儀礼を受ける仙人候補者は、杜子春がそうであるように、自発的に仙人になろうと志すのではなく、下界を往来する仙人に、本人も自覚していない「仙骨（仙人になる素質）」を発見されてスカウトされ、仙人修行を課せられるというケースがめだつ。自発的な決意のもとに、理論的にも実践的にも仙人たらんと志した魏・晋の神仙思想家はむろんのこと、この世の軋轢から離脱するために必死で肉体の純化につとめた漢代の庶民仙人に比べても、中国の仙人像は時代が下るとともに、受動的なものとし、俗化の度合いを強めたといえそうだ。